令和３年度　第75回夏休み良書推薦運動

読書感想文コンクール

主　催　岩手県良書推進協議会
協　賛　岩手県学校生活協同組合
後　援　岩手県小学校長会
　　岩手県学校図書館協議会
　　岩手県ＰＴＡ連合会

目次

一　祝辞
二　入賞者名簿
三　入賞者作品
四　審査を終えて
五　応募者名簿

審査員

大石善弘先生
近藤澄江先生
畠山明美先生
藤村由美先生
田代五月先生
大渕奈実先生
永井臣之介先生
杉浦美香子先生
谷藤里佳先生

読書感想文は皆さんの成長の証

岩手県学校図書館協議会　会長　中　村　雅　彦
（盛岡市立向中野小学校長）

岩手県良書推進協議会第七十五回夏休み良書推薦運動読書感想文コンクールに入賞された三十三名の皆さん、学校賞、学級賞を受賞された皆さん、おめでとうございます。コンクールの表彰式は、新型コロナウィルス感染症拡大防止のため中止となりましたが、この冊子には、入賞者の皆さんの名簿、審査講評、応募した方々の名簿、そして何より最優秀賞・岩手県小学校長会長賞・岩手県学校図書館協議会長賞・岩手県ＰＴＡ連合会長賞に入賞した十五名の作品の全文が紹介されています。私はこの作品の一つ一つを読ませていただくことをとても楽しみにしています。本の魅力が生き生きと伝わってくるだけでなく、本との出会いがあってこその、読者としての皆さんの成長に、喜びを感じることが多くあるからです。

夏休みに先立って、岩手県良書推進協議会から四十二冊の優良図書が選定され、本の表紙と内容の紹介が書かれた袋が配布されました。題名とともに紹介文を読むと、どの本にも興味が湧いてきて、全部の本を読破できたらどんなに楽しいだろうと、欲張りな思いが膨らんできます。皆さんも、自分が選んだ本だけでなく、他に興味をもった本があったのではないでしょうか。そこでお勧めしたいことは、他の人が書いた感想文を読んでみることです。他の人の感想に共感しつつ、自分ならどんな感想をもつだろうかと、読む観点がはっきりする効果もあります。感想を交流したり、語り合ったりする機会があれば、さらにいいと思います。読書の輪が広がっていくことは素晴らしいことです。

今年の夏は、東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。困難を乗り越え、挑戦し続けるアスリートの姿に心が熱くなった人も多かったことでしょう。また、日本の経済の礎を築いた渋沢栄一の生涯を描いた大河ドラマが放映され、その人物像をもっと知りたいと思っている人も多いと思います。推薦図書の中には、私たちの興味関心に応えてくれそうな、今だからこそ読みたい本が並んでいます。

皆さんには、これからも未知の世界、豊かな世界に導いてくれるような、心に残る本との出会いが待っていることと思います。その時々の感動を書き記す、読書感想文への取組は、皆さんの成長の記録、成長の証として価値あるものになっていくことでしょう。読むこと、書くこと、考えること、交流することなど、読書を通した豊かな経験が、皆さんの未来の糧になっていくことを願っています。

令和3年度　第75回
夏休み良書推薦運動読書感想文コンクール
入賞者名簿

『　』は図書名

〈最優秀賞〉

まよなかかいぎをよんで　『まよなかかいぎ』
盛岡市立向中野小学校　一年　藤井莉愛

わたしのもちもの　『まよなかかいぎ』
盛岡市立上田小学校　二年　土井尻千紗

みんなでしあわせに　『すてねこたちに未来を』
盛岡市立土淵小学校　三年　金森一花

ぼくのお母さん、最強につき　『かあちゃん取扱説明書』
釜石市立鵜住居小学校　四年　久慈廣多

本当の自分らしさ　『自分コンプレックス』
宮古市立田老第一小学校　五年　晴山紗芳

自分の色を求めて　『ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き』
盛岡市立中野小学校　六年　小野寺朝妃

〈岩手県小学校長会長賞〉

みえるとか　みえないとか　『みえるとかみえないとか』
盛岡市立北厨川小学校　二年　山本愛桜

だれにだってすくえる命はある　『すてねこたちに未来を』
盛岡市立土淵小学校　四年　菊池舜人

人生という超大作　『ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き』
宮古市立崎山小学校　五年　祝田優

〈岩手県学校図書館協議会長賞〉

わくわく、ないしょのオリンピック　『ないしょのオリンピック』
花巻市立大迫小学校　一年　松坂優凜

ぼくのかあちゃん取扱説明書　『かあちゃん取扱説明書』
一関市立川崎小学校　三年　千葉翔生

「自分コンプレックス」を読んで　『自分コンプレックス』
奥州市立水沢小学校　六年　千葉結奈

〈岩手県ＰＴＡ連合会長賞〉

まよなかかいぎがおしえてくれたこと　『まよなか かいぎ』
宮古市立山口小学校　二年　箱　石　好　南

かあちゃん取扱説明書を読んで　『かあちゃん取扱説明書』
盛岡白百合学園小学校　四年　佐々木　千　紗

〝社会の父〟に育てたものは　『渋沢栄一伝』
宮古市立田老第一小学校　五年　大　下　澪

〈優秀賞〉

「さくらこのコックさん」　『おばけのコックさん』
花巻市立八幡小学校　一年　菅　原　桜　子

だれとも仲よく友だちに　『宇宙人がいた』
盛岡市立仙北小学校　二年　宮　城　理　愛

小さないのちをすくう　『すてねこたちに未来を』
軽米町立晴山小学校　三年　古　舘　陽　和

相手のことを見て考えたい　『かあちゃん取扱説明書』
盛岡市立中野小学校　四年　押　川　笑

高層ビルってすごい　『超高層ビルのサバイバル』
宮古市立田老第一小学校　五年　伊　藤　恵　奈

となり合わせの生と死　『大切な人は今もそこにいる』
盛岡市立土淵小学校　六年　吉　田　航

〈入選〉

「はがぬけたに～」をよんで　『はがぬけたに～』
盛岡市立永井小学校　一年　奥野千雪

くふういっぱいのオリンピック　『ないしょのオリンピック』
平泉町立長島小学校　二年　千葉愛美

五百円の使い道　『めいちゃんの５００円玉』
奥州市立水沢小学校　三年　松本花菜

すてねこたちの未来のために　『すてねこたちに未来を』
盛岡市立土淵小学校　四年　八重樫翔

本は人と人をつなぐ　『あるかしら書店』
一戸町立奥中山小学校　五年　猪又日葵

想像力を大切に　『あるかしら書店』
北上市立黒沢尻北小学校　六年　菅原愛未

〈学校賞〉
盛岡市立土淵小学校

〈学級賞〉
宮古市立田老第一小学校　５年

〈佳作〉

わたしのはがぬけた　『はがぬけたに～』
盛岡市立本宮小学校　一年　生平志乃

「めいたんていになるには」　『めいたんていサムくん』
一関市立藤沢小学校　二年　玉澤璃知佳

ふしぎなエレベーターのボタン　『エレベーターのふしぎなボタン』
盛岡市立山岸小学校　三年　芳賀明里

「仲間とのきずな」　『ぼくらのなぞ虫大研究』
盛岡市立向中野小学校　四年　山崎樹空

思いやりのあるジョアン　『ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き』
盛岡市立土淵小学校　五年　佐藤由梨

生きることと死ぬこと　『大切な人は今もそこにいる』
宮古市立山口小学校　六年　箱石香乃

一年　最優秀賞

まよなかかいぎをよんで

盛岡市立向中野小学校　一年
ふじい　りさ

ランドセルのなかから、えんぴつやけしごむがとびだしてきたよ。わたしはびっくりしました。わたしのあかいランドセルからも、よるになってわたしがねてから、はいっているものがとびだしてきて、かいぎをはじめてたらどうしよう。わくわくするけど、すこしこわくなってきました。

ゆうきくんのランドセルからは、えんぴつやノートや、けしごむやクレヨンがとびだしてきて、ゆうきくんが、がっこうでしっかりべんきょうしていることをはなしてくれました。でも、じょうぎとはんかちは、まだちゃんとつかってもらってないんだって。わたしは、はんかちはまいにち、てをあらったあとにつかっています。だけど、ゆうきくんといっしょで、じょうぎはまだつかえていません。せんをひくときは、ぐにゃぐにゃまがったせんをひいています。わたしのじょうぎも、よるのかいぎでなみだをながしているのかな。だったらかわいそう。わたしは、あしたから、せんをひくときはぜったいにじょうぎをつかうことにします。

がっこうでつかうどうぐは、おうちのひとにかってもらった、たいせつなどうぐばかりです。ふでばこは、おねえちゃんがえらんでくれたし、おきにいりのあかいランドセルは、おばあちゃんにかってもらったわたしのたからものです。だから、わたしが6ねんせいになるまで、だいじにつかいたいです。

このほんをよんで、ランドセルのなかのどうぐにも、こころがあるのかなあ、とおもいました。だって、このほんのなかでは、どうぐはないたりおこったり、よろこんだりするからです。ほんとうのどうぐはおはなしはしないけど、こころがあるのかなっておもって、つかいたいです。そして、まよなかかいぎで、わたしがたくさんほめられるようにしたいです。

（図書名『まよなか かいぎ』）

〈講　評〉

莉愛さんは主人公のゆうきくんと自分を比べながら読むことができました。特に、ゆうきくんのじょうぎの使い方を自分の使い方と比べて、「線を引く時はぜったいじょうぎを使おう。」と決心したところは、読んでいて莉愛さんの様子を思い浮かべることができました。

また、読み始めた時はちょっぴりこわかったまよなかかいぎが、最後には、文ぼう具達にほめられるように使おうとかわっていました。本を通して文ぼう具の思いを想像することができたのだと思います。眠る前に今日はどんなかいぎになるのかなと考えたら、夢の中でかいぎに参加できるかもしれませんね。

二年　最優秀賞

わたしのもちもの

盛岡市立上田小学校　二年
土井尻　千　紗

わたしは、まよなかかいぎとは、どんなかいぎなんだろうと思いました。それは、ゆうきくんのもちものたちが、ゆうきくんが、よるに、ねているあいだにひらくかいぎのことでした。ゆうきくんの学校での一日のことを話していました。

あつまったものたちは、いろんなかおをしていました。にこにこがおのえんぴつやけしゴムや、ノートがいる中で、かなしそうなかおをしているじょうぎのことが、わたしは気になりました。じょうぎがないているりゆうは、ゆうきくんがちゃんとじょうぎをつかっていないからでした。

わたしは、はっとしました。じぶんのもちものたちは、どんなかおをしているかなと思いました。わたしのえんぴつはどうかな。わたしは、えんぴつをみじかくなるまで、大切につかうようにしています。ノートはどうかな。二年生になって、前よりていねいに字を書いて、きれいにノートにまとめられるようになりました。きっとえんぴつとノートは、うれしそうなかおをしていると思います。

下じきはどうかな。学校ではちゃんとつかうけれど、いえでしゅくだいをやるときにはあまりつかっていないなと思いました。ハンカチはどうかな。てさげバッグに入れたままのときもあったなと思い出しました。少しかなしいかおをしていたかもしれません。

ふでばこはどうかな。あたらしいふでばこを見ると、こわれたわけではないけれど、じぶんもあたらしいふでばこがほしくなりました。わたしのふでばこは、かなしくなったかもしれません。でも、今は少しくらいどこかこわれても、大切に長く、つかいたいと思っています。この本を読んで、そう考えました。

わたしのもちものも、まい日学校でおうえんしてくれていると思いました。これからもおうえんしてほしいから、大じにしたいです。

（図書名『まよなか　かいぎ』）

〈講　評〉

千紗さんは「まよなかかいぎ」とはどんなかいぎかなと思いながら読み始めています。かいぎの説明もお話をよく読んで短くまとめていてすばらしいです。

おどろいたのは、千紗さんが道具達の顔に注目したことです。文章だけでなく絵も楽しんでくれたんだなとうれしくなりました。

そして、さらに自分の道具達の顔も一つ一つ思い浮かべて文章にしています。まるで、千紗さんもかいぎに参加しているようです。

この本を通して、持ち物達が応援してくれていることに気付いたので、学校がもっと楽しくなるかもしれませんね。

三年　最優秀賞

みんなでしあわせに

盛岡市立土淵小学校　三年
金森一花

わたしは、よくペットショップに行きます。犬をかいたいと思っているからです。

ペットはかわいいけれど、死んでしまうのは悲しいです。学校でかっていた青虫が死んでしまった時も、お母さんに話しているうちになみだが出てきて、ないてしまいました。もし、家で犬をかっても、死んでしまったら、すごく悲しいし、たくさんなくと思います。

わたしが、この本を読もうと思ったのは、小学生がねこをお世話するお話だったので、さん考にしてみたいなと思ったからです。

小学四年生のなちゅらちゃん（ちゅんちゃん）は、お母さんといっしょにほごねこ活動をしています。パトロールしたり、ねこをほごしてお世話したり、新しいかいぬしを見つけるためにじょうと会を開いたりしています。

もし、わたしが、ほごねこのお世話をしたら、ソファーをやぶかれたり、お気に入りのぬいぐるみをちぎられたりするんじゃないかと心ぱいになると思います。そして、じょうと会でねことおわかれするのが悲しくなって、わたしたくなくなってしまうと思います。

でも、ちゅんちゃんは、ねこがしあわせになる事だけを考えて、一生けんめいお世話をしていました。たくさんのねこを送り出して、しかも、じょうと後にも里親さんにれんらくをとっていたので、すごいなと思いました。

この本を読むまで、ほごねこ活動はノラねこをほごするイメージだったので、わたしにはできないと思っていました。でも、この本を読んで、里親になったり、じょうと会を知らせる事も、ほごねこ活動になると知って、わたしにもできるかもしれないと思うようになりました。今は、ねこをかいたいです。

そして、ねこをかう時には、ペットショップではなく、じょうと会からむかえようと思っています。一ぴきでも多くの命をすくいたいからです。わたしが里親になったら、ねこにとってしあわせにすごせるように、あいじょうをたっぷりそそいでお世話したいです。

その命を大切にして、と中でなげ出さずにさいごまでお世話をすることは、かいぬしとしてのせきにんだと思います。ねこが死ぬ時を見まもるのは、悲しくてつらいと思うけれど、がんばってのりこえたいです。

今、ねこをかっている人も、わたしのようにこれからかいぬしになろうとしている人も、さいごまでせきにんを持つ事ができれば、きっと、すてねこはいなくなると思います。

ちゅんちゃんのように、わたしも、すてねこたちに何かできる事がないかさがしてみました。近くのほごねこ活動をしているだん体は、今はコロナで、じょうと会やボランティアのお手つだいはむずかしそうでした。だから、わたしは、自分のお金でほごねこちょ金をはじめました。大きな活動ではないけれど、わたしのほごねこちょ金をきふして、すてねこたちにみらいを作りたいです。

（図書名『すてねこたちに未来を』）

〈講　評〉

いつも優しい心で動物たちのことを思っている一花さんにとって魅力的な本との出合いでしたね。もし、自分だったらどうするのだろうと、丁寧に読み進めながら感想をもちました。ほごねこ活動に興味をもち、命の大切さ、生き物を飼うことの責任について考えを深めた感想は、動物が大好きな一花さんの心からの言葉であったように思います。「ほごねこちょ金」はよいアイディアですね。夢が実現できるようがんばってください。

四年　最優秀賞

ぼくのお母さん、最強につき

釜石市立鵜住居小学校　四年
久慈廣多

哲哉の気持ちほんとわかる。だって、哲哉もぼくとおんなじことで怒られているから。こんなに毎日ガミガミ怒られるなんて！

【ぼくの怒られリスト】

・「早く起きなさい！何時だと思っているの！」と朝一番から怒られる。最悪の目覚め。

・「いつまで食べてるの！ちこくするよ！」と朝ごはんを食べるのをせかされる。お母さんの支度が一番おそいじゃんって毎回思う。

・学校から帰ってくるともっと大変。「勉強しなさい」「早くお風呂に入りなさい」「早くねなさい」の早く早く攻撃。「いつまでゲームやってるの！」はしょっちゅう、怒り大ばく発、雷地ごく。

ちなみにお父さんもお母さんに毎日怒られている。ぼくとお父さんは戦友だ。

ぼくもお母さんのトリセツを考えて見ることにした。どんなときにきげんがいいか、特別機能やお手入れ方法について。

・学校の漢字・計算コンクールでどちらも百点をとった。百点をほめられるのかと思ったら、練習問題を毎日がんばったからだとほめられた。その日はお寿司を食べた。お母さんはおいしいおいしいと言ってとってもうれしそうだった。

・お母さんは料理が上手だ。スーパーで野菜や果物、とりわけおいしそうな魚を見ると目がキラキラしている。ぼくにおいしいごはんを食べさせることが生きがいなんだって。

・お母さんは毎日毎日、仕事も家のこともがんばっている。一番早く起きて、一番おそく寝る。休みの日も休むひまなく、そうじをしたり、ごはんを作ったり、ぼくの習い事の送り迎えにと大忙しだ。これは、ぼくとお父さんでマッサージをしてあげよう。おこづかいアップ大作戦だ。

そうやって考えていくうちに、あることに気がついた。お母さんってすごくない!?

ぼくが朝起きると、お弁当と朝ごはんができていて、いつもいいにおいがする。ぼくが着るものには全部アイロンがかけてあって、とっても気持ちがいい。テストの点数が良くなくても怒らない。大事なことは努力するかしないかだって。それから、自分で考えて自分でできたことはめちゃくちゃほめられる。ぎゅうぎゅうに抱きしめられる。もう四年生なんですけど、と思いながらもちょっとうれしい。テレビから、オリンピック金メダルのニュースが流れている。お母さんも最強金メダリストだ。いつもありがとう！

ということは…？もしかして、怒られているのはぼくのせい？ガミガミうるさいと思っていたけど、なんだか風向きが変わってきた。途中まで書いたトリセツにお母さんの字で一言書いてあった。

「言われる前にやりなさい」

唯一の怒られない方法だ。哲哉にも、お父さんにも教えてあげよう。

（図書名『かあちゃん取扱説明書』）

〈講　評〉

楽しみながら本を読み、感じた思いがどんどん湧き上がってきたことが伝わる感想文です。テンポのよい文章で、初めから最後まで引きつけられます。「取扱説明書」という本の内容から取り入れたと思われる箇条書きも、大変ユニークで廣多さんらしい書き方です。

読書を通して、いつも廣多さんのことを大切に思い愛情を注いでくださるお母さんの存在にも気付きましたね。自分らしい表現で家族への思いを書き上げることができました。

五年　最優秀賞

本当の自分らしさ

宮古市立田老第一小学校　五年
晴山　紗芳

自分にとっての一番の親友。だからといって、何でもかんでも真似されたらどうだろう。ペンやキーホルダー、服装、そしてヘアスタイルまで。何から何まで真似をされた心は、道子のことを気持ち悪いと思いながらも、本音を言えずにいた。それは、道子を傷つけるかなと思ったから。優しさから言えなかった。もし、私が心と同じように、誰かに徹底的に真似されてると分かったら、案外あっさり「もう真似するのはやめて。」と言える気がする。そういう私は、心に比べたら冷たいと言えるだろう。でも、私がそんなふうに言ったにも関わらず、相手が私の真似をし続けたとしたらどうだろう。多分、何か理由があるのかと考え込み、心と同じようにモヤモヤとした思いを抱えながら、何も言えない日々を過ごしそうだ。そういう点では私は心と似ているように思う。

しかし、私の中に道子に似た部分があり、判断を人に任せてしまうこともある。それは洋服を選ぶときに出てくる。良いなと思うものを二つ、三つ手に取るが、どれがいいか迷ってしまう。一人では決めきれない。そんなときは、必ず母に頼る。そして母の意見で決定する。なぜ、そうするのかというと、第一に楽だし、安全だから。もし、一人で無理に決めたとしたら、何かの拍子に「あっちの方が良かったかなあ。」なんて、いつまでも引きずりそうだ。大体、どっちもいいから迷ったのであって、自分じゃない誰かに賛成してもらったから安心だ。

千穂が言っていた言葉が私の心に響く。

「あたしたち女子は、出る杭は打たれるって、なんとなく本能で知ってんじゃん。」

その言葉に納得したのは心より私だと思う。会話の空気を読んで、適当に相づちを打ったり、自分の本意でなくても相手の好みに近いものを選んだりしている。授業中の教室移動のときだって、友達と一緒じゃないと移動を始めなかったりもする。それで、クラス全体が遅い移動となり、先生に怒られることもあったけど、一人じゃないし「まっ、いいか。」なんて思うし、それほど悪いことをしたとも思わなくて済む。

でも、これから先のことを考えると本当にこのままでいいのかなとちょっと不安になる。今、一緒のクラスの友達が、ずっと一緒にいるわけじゃないし、ずっと母のアドバイスに頼りっぱなしっていうわけにはいかないだろう。にわかに曇った私に、松尾准教授が答えをくれた。「人は自分が平凡と感じる虚しさを埋めるため、人の真似をすることがある。でも、本当の自分らしさを手に入れるためには自分づくりが必要」なのだそうだ。今は少し自分に自信がなくて、友達や家族に頼っているところがある。でも、それを繰り返しながら、自分にしっくりくるものを探していけばいいんだ。よし、やってみようっと。

（図書名『自分コンプレックス』）

〈講　評〉

紗芳さんは、自分にぴったりと合う素敵な本に出会えたのでしょう。本を読み進めながら、登場人物との共通点を見つけ、紗芳さんにとっての「自分らしさ」とは何かを、考えることができましたね。

物語の中で印象に残った登場人物の言葉が引用されていますが、それが大変効果的です。また、感想文の終末に向かって、紗芳さんが自分と向き合い、様々なことを考えたことが伝わってきました。文章全体の構成や、まとめに向かう文章力も素晴らしかったです。

六年　最優秀賞

自分の色を求めて

盛岡市立中野小学校　六年
小野寺　朝　妃

人はそれぞれちがう「色」をもっている。明るい色、暗い色、暖かい色、冷たい色…私の色はどんな色だろうか。自分の色を探し続けるジョアンに、自分を重ねながらこの本を読み進めていった。

ジョアンは、小さいころに母を亡くし、三か月前に父も亡くした。父が働いていた理容店に引き取られ、父のような立派な理容師になることを周りから望まれていた。理容師になりたいかどうかわからないジョアンは真っ黒な絵描きシタンと出会い、変わっていく。シタンは、はでな色合いの絵ばかりを描いていたが、ジョアンが引きつけられたのは暗くて地味なセーヌ川の絵。なぜその絵だったのだろうか。きっと「真っ黒なシタン」と「暗い色」と「ジョアン自身」が似ていたからだと思う。シタンは絵を描くとき、始めに暗い色で描き、その後絵を引きさくように上から明るい色で描いていた。シタンは、絵を描くことでジョアンに「色」のある考え方や生き方を教えていたように私には感じられた。

ジョアンは絵を描くことが好きになり、絵描きを志すようになる。あるときシタンに芸術の最先端のニューヨークにさそわれ、ジョアンはおなかの底からみなぎってくるのを感じた。ジョアンが自分を探せるチャンスだと私は思った。しかし、ジョアンは行かなかった。本当に大切なものは近くにあると気付くことができたから。今度は自分の意志でみんなに認められる理容師になる、そしてこれからも絵を描き続けると決めた。決めることができたジョアンはとても生き生きとしていた。これが本当の「夢」なのだ。他人ではなく、自分が決めた夢。赤・青・黄で多様な色を作ることができるのと同じように、ウゴおじさん、リル、白い犬、そして亡くなった父がジョアンの心の支えとなり、ジョアンの「色」を作り出したにちがいない。

私は自分に自信がもてず、他の人からの指示を待つことが多い。他の人から期待されたことも大事なことだけど、「自分の人生は自分で決定していくことが大切だ」とこの本から学んだ。人の「色」は、自分の好きなものを見つけたとき、自分で目標に向かっていくときに作られ、どんどん増えていくと思う。そして色は一つ一つに意味があり、一人一人の個性を表したもの。同じ色の人に出会えたらそれは奇跡。「色」は日々変化していく。自分が楽しかったときの色も失敗したときの色も全部が混ざり合って、自分の色が完成する。私は何色だろうか。六年間大事に使っているランドセルの水色、大好きなピアノのけんばんの白と黒、毎日使っている勉強机のピンク…私の人生はまだまだこれから。自分だけの「色」を作り出すために、これからたくさんの人や本、経験に出会い、自分で進む道を決めていこう。ジョアンみたいに「色」であふれる人生を送れるように。

（図書名『ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き』）

〈講　評〉

「色」を軸として、物語を読んで感じたことを素直に書くことができています。主人公と自分を重ねながら読むことで、物語に入り込んで、その世界をたっぷりと味わうことができたのでしょう。

終末部分には、朝妃さんの考えが力強い文章で表現され、引き込まれました。自分を取り巻く様々なものが混ざり合い、これから、朝妃さんの「色」が作り出されて行くのが、とても楽しみですね。

岩手県小学校長会長賞（低学年）

みえるとか　みえないとか

盛岡市立北厨川小学校　二年
山本　愛桜

うちゅうひこうしの男の子が、うちゅうに行きました。いろいろな星に行って、たくさんのうちゅう人と出会います。そして、たくさん話をして、うちゅう人となかよくなります。男の子は、自分とうちゅう人の同じところや、ちがうところをはっけんしました。

たとえば、うちゅう人の中には、目がたくさんあって、自分のせ中まで見える人がいます。ちきゅう人とはちがいます。でも、そんなうちゅう人の中には、目が見えない人もいます。それは、ちきゅうと同じです。

目が見えないうちゅう人とちきゅう人は、どちらも歩くのがたいへんです。見えないと、あぶないことに気づかないからです。とてもふべんだと思います。

だから、目が見えなくても歩きやすいように自分で考えてくふうしたり、生活しやすいようにくふうしたりしていました。すごいなあと思いました。

目が見えなくても、その分耳や手をつかって、自分ができることをがんばっています。自分にたりない分をほかのぶ分をつかいながら、しごとをしてみんなのやくにたつことができるのです。できないことがあってもいいんだと思ったら、元気が出てきました。

わたしは、友だちと自分をくらべて、ちがっていると心ぱいになります。友だちは、じょうずにできることが、自分はじょうずにできないと、自しんがなくなってしまいます。

でも、この本を読んで、できないことでもくふうしてやってみたり、しっぱいをしながらはっけんしたりすることができるように思いました。そして、友だちと教え合っていけば、できることがふえていきそうです。

自分とちがうことをこわがらないで、目が見えない人やこまっている人がいたら、わたしができることをお手つだいして、たすけてあげたいと思いました。

（図書名『みえるとか みえないとか』）

〈講　評〉

愛桜さんは主人公と一緒に宇宙旅行に行ってたくさんの宇宙人達と出会ったようです。

今までは、自分と友達を比べてちがっていることが不安だった愛桜さん。

でも、本を読み進めていくうちに、足りない部分があっても、出来ないことがあっても、ちがっていても、失敗しても大丈夫と思えるようになっていったのですね。

この本を読んで、物事の見方が変わっていったことが、とても分かりやすく書かれています。素晴らしいです。やはり、主人公と共に広い宇宙を旅しただけありますね。

岩手県小学校長会長賞（中学年）

だれにだってすくえる命はある

盛岡市立土淵小学校　四年
菊池　舜人

ぼくは大のねこ好きです。本を選ぶ時にかわいいねこの表紙に目を引かれて、すぐ手にとりました。

また、ぼくと同い年の子がやっている「保ごねこ活動」がどんな事なのか気になったのも理由です。

まず初めにおどろいたのは、主人公のちゅんちゃんの家には保ごねこが三十匹以上もいるという事です。本の中で、

「シッポをふんづけるところでした。」

と書かれていたので、それほどたくさんのねこをかっているのかとてもうらやましく思いました。

しかし、活動は楽しい事ばかりではなくて、すごい大変なんだと本を読んで知りました。

沢山の子ねこに一匹ずつミルクをあげたり、親ねこやかい主に捨てられたねこを見つけてケガをしながらつかまえたり、大事に育てていたのに死んでしまったり。

でもぼくが一番つらいなと思ったのは、里親に出すところでした。ちゅんちゃんが初めてつかまえた「つばさ」の里親が見つかって、いよいよ渡す時に泣くのをがまんしていたけれど、玄関のとびらが閉じたとたんに大声で泣いたそうです。何でがまんしたのかというと、里親をこまらせてしまうしつばさが幸せになるためのことだからです。ぼくだったらはなしたくなくてきっと泣いてしまうかもしれません。ちゅんちゃんはとても心が強いなと感じました。

里親について調べている時に、

「動物を育てることは子育てと同じこと」

という言葉を見つけました。

子供と同じように大事に育てたねこを里親にじょうとするとしたら、ちゃんとごはんを食べさせたりお世話をしてくれる人なのかをしっかりかくにんできないと安心できません。ねこの一生を責任持って大事に育ててくれないと、また捨てられてしまう事になります。だからじょうとする里親がどんな人なのか、よく見てから渡すのは大切な事だと思います。

ぼくは大のねこ好きですが、実さいにお家でねこをかってあげることはできません。

しかし、大人のノラねこを保ごするＴＮＲという活動で、ねこを助ける事ができるかもしれないと、本を読んで知りました。

ＴＮＲとは、ねこを病院に連れて行き、子供が生まれないよう不にん手じゅつをしてもとの場所に戻すことを言うそうです。この活動をすることで、ノラねこがへるのだと学びました。手術をした後のねこは目印に片方の耳にさくらの花のような切りめを入れるそうです。またその耳はさくら耳と呼ぶそうです。

ちゅんちゃんのようにねこパトロールをしながら、さくら耳ではないノラねこをさがしてみようと思いました。小さなことでもみんなでやると大きくなっていきます。自分も救える命がある事を、教わりました。

（図書名『すてねこたちに未来を』）

〈講　評〉

保護ねこ活動の大変さや里親に出すときのつらさに目を向け、共感しながら読むことができました。自分とつなげて読むことで感想を深めていることが分かります。また、里親について調べたり、実際に飼うことができない自分でもできる活動に興味をもったり、読んだことからさらに考えを広げたり深めたりしていることも舜人さんの読書の素晴らしさです。「自分も救える命がある」ことを教わった素晴らしい本との出合いでした。

岩手県小学校長会長賞（高学年）

人生という超大作

宮古市立崎山小学校　五年
祝田　優

ジョアンという少年が父親を失い、父親も働いていたシャ・キ・ペシュ理容店に引き取られたところからこの物語は始まります。ジョアンは、自分を引き取ってくれたウゴおじさんや、周りの大人達の期待に応えようと、その理容店のために、色々なことを覚えようとしますが、あまり上手くいきません。そんな中黒い絵描き「シタン」に出会い、シタンが描く絵にひかれていきます。シタンと過ごす中で、ジョアンに「やりたいこと」が生まれ、そのやりたいことのために試行錯誤しながら進む物語です。

ぼくは、この物語を読み進めながら、「ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き」という題名にもある、「色」の正体を探るようになりました。自分なりに色の正体を考えたところ、それは、「やりたいこと、好きなこと」だと予想しました。

その理由は、ジョアンが、自分の姿を想像するところにあります。ジョアンを引き取ってくれたウゴおじさんが、カミソリを使う姿を見て、ジョアンは自分がカミソリを使う姿を想像できませんでした。一方、自分が絵を描く姿はすぐに想像できました。ぼくはこのことから、自分がそれをしているところを想像できないというのは、ジョアンにとって好きではない・やりたくないこと、色のない世界だったからと考えました。一方、自分がそれをしているところを想像できるというのは、ジョアンにとって、好きなこと・やりたいこと、色のある世界だったからと考えました。

ぼくはこの本を読んで作者が伝えたいことは、自分の好きなこと・やりたいことをしなさいということだと思います。ぼくもこの考えに共感しました。大人達に自分の好きなことや憧れをうばわれるのは辛いし、嫌だと思います。そして物語の最後に、様々な色が混ざり合った、巨大な壁画が登場します。それは、人それぞれ好きなことがあり、それがどんなことであっても、色んな人と出会って、混ざり合っていくことにより、いつか一つのいいものが生まれるということを伝えたかったのだと思います。

ジョアンは、この物語の中で、自分の色が決まりましたがぼくはまだ定まっていません。歌や運動も好きで、科学も好きです。三つも好きなこと、やりたいことがあります。ぼくは、今すぐ色を決める必要はないと思います。色は何度も、混ぜる色を変えたり、量を変えて調節して思い通りの色になります。このように、人生のうちに様々なことに挑戦していって自分の色を決めたいです。ぼくの色がもし決まったら、この人生という超大作で、自分の色を使ってたくさんの絵を描いていきたいです。

（図書名『ぼくに色をくれた真っ黒な絵描き』）

〈講　評〉

自分の「色」とは、「やりたいこと・好きなこと」。作者の伝えたかった思いを受け取り、共感しながら読むことで、優さん自身の考えを深めることができましたね。優さんの文章から、様々な人と出会うことで、「色」は変化し、いつか一つの超大作に出会えるのだと、考えさせられました。

たくさんやりたいことや好きなことのある優さん。これからの人生で、様々な「色」の変化を楽しんでください。

岩手県学校図書館協議会長賞（低学年）

わくわく、ないしょのオリンピック

花巻市立大迫小学校　一年
松坂ゆり

「がんばれ、がんばれにっぽん。」

わたしは、テレビのまえでおとうとと大きなこえでおうえんしました。ことしのなつやすみは、とうきょうオリンピックがあったので、いろいろなきょうぎをかぞくでおうえんして、もりあがりました。

だけど、本のだいめいが「ないしょのオリンピック」です。わたしは「ないしょってどういうことかなあ。」とおもいました。

かぞくみんながでかけたあと、だれもいなくなったときに、おふろにうかべるアヒルさんやくまのクッションなど、いえじゅうのものがみんなでオリンピックをするおはなしでした。ほんとうのオリンピックみたいに、いろんなきょうぎをしていました。

クレヨンが、ピアノのくろいけんばんをハードルにしてとんでいたり、せんめんだいの水のなかで、はブラシたちがアーティスティックスイミングをしたりしていました。

そのなかでも、とくにおもしろかったのは、にかいへあがるかいだんのかべをつかって、スポーツクライミングをしていたところです。おもちゃのおんなのこが、がびょうや、しゃしんにつかまって、がんばってのぼろうとしていました。ヘビのおもちゃや、ゴムてぶくろまでのぼっていました。わたしも、なつやすみのこどもかいでスポーツクライミングをしたことがあったので、さんかしてみたいとおもいました。

それから、オリンピックなのにメダルをじゅんびしていなかったところが、おもしろいとおもいました。みんながあちこちから、いろんなものをもってきて、いろんなかたちのメダルをつくったのが、すてきでした。

わたしも、おもちゃたちといっしょに、ないしょのオリンピックをしてみたいな。わたしのへやをつかったらどんなしゅもくができるかな。とかんがえると、わくわくしました。

（図書名『ないしょのオリンピック』）

〈講　評〉

優凜さんは、今年の夏にぴったりな本を選びました。テレビの前でもオリンピック選手達を応援して、お話を読んでいる時も、お話の中の選手達を応援していたのでしょうね。

特に、スポーツクライミングの場面は、絵もよく見て、さらに、自分が経験したことも思い出しながら書いていたので感心しました。

「私の部屋ならどんな種目ができるかな。」と想像しながら読んでいるので、この本を楽しんでくれたことが伝わりました。優凜さんの部屋のまよなかのオリンピックの話を書いてみるのもおもしろそうですよ。

岩手県学校図書館協議会長賞（中学年）

ぼくのかあちゃん取扱説明書

一関市立川崎小学校　三年
千葉翔生

ぼくが、この本をえらんだ理由は、「かあちゃん取扱説明書」という題名にひかれたからです。この本を読んだら、ぼくのお母さんにも、使えそうだと思いました。

四年生のてつやは、いつもガミガミうるさいかあちゃんを、思いどおりに動かすためにかあちゃんの取扱説明書を作ることにしました。そして、かあちゃんをかんさつしているうちに、かあちゃんの気持ちがわかってきました。

ぼくは、てつやの取扱説明書で、さんこうになるのが三つあります。一つ目は、『べん強、べん強と言わせない方ほう』です。ぼくも、学校から帰って来てすぐに宿題をやる時にはおこられません。でも、いつまでもダラダラしていると、

「いつになったら宿題するの。」

と言われます。だから、ぼくもてつやのように、学校から帰ってきたらすぐに、つくえの前に向かえばいいのだと思いました。

二つ目は、『食べたいごはんを作ってもらう方ほう』です。ぼくのお母さんに、

「そうざいよりも、お母さんの作ったハンバーグのほうがおいしいんだよね。」

と言うと、だいこうぶつのハンバーグになります。ほめると、すきなメニューになるのは、てつやのかあちゃんに、にていると思いました。

三つ目は、『早くしなさいと言われない方ほう』です。てつやは、

「宿題やる。」

「お風呂入っちゃお。」

と、やるべき事を口に出して言っておくと早くしなさいと言われないと言っていました。でも、ぼくのお母さんはぼくがすぐに行動しないのを知っているので、口で言うだけでは、ガミガミ言われます。だから、お母さんに言われる前に、行動すればいいのだと思いました。

この本を読んで、ガミガミ言うお母さんの気持ちが分かってきました。ぼくの家は、お父さんがたんしんふにんなので、平日はお母さん一人で、ぼくたち兄弟四人の面どうを見てくれています。だから、とてもいそがしくしています。ガミガミお母さんにしないためには、ぼくの行動が大事なんだと気づきました。いやな事は後回しにせず、すぐにやることや、物を大事にする事、すききらいをしないで全部食べることなど、出来る事から取り組んでいきたいです。そうすれば、ぼくのお母さんもガミガミお母さんから、いつもニコニコお母さんにかわると思います。「かあちゃん取扱説明書」とは、自分がかわることで、相手もかわることができる、とてもすごい説明書です。ぼくの友だちにてつやがいたら、いっしょに「ぼくのかあちゃん取扱説明書」を作ってほしいと思いました。

（図書名『かあちゃん取扱説明書』）

〈講　評〉

主人公てつやの取扱説明書から三つ参考にしたいと考えた翔生さん。てつやの方法をそのまま使えるものと、自分なりに変えて使いたい方法と、しっかり読んでよく比べたから出てきた感想です。さらにお母さんの気持ちを想像したり、自分のこれからの行動について思いを深めたりすることができました。この本から学んだ「自分がかわることで相手もかわることができる」という考えは、様々な人との関わりでも大切にしていきたいですね。

岩手県学校図書館協議会長賞（高学年）

「自分コンプレックス」を読んで

奥州市立水沢小学校　六年
千葉結奈

この本の主人公は、私と同じ十代の高校一年生の女の子です。いつの間にか、主人公と同じ気持ちになって読んでいました。読み進めていくうちに、私が友達との関係で悩み、苦しい思いをしていた時のことを思い出しました。心が痛みました。それは、自分がしたことにとても後悔したからです。

中学三年生からの親友の心と道子は、他の友達も認めるほど息の合う仲良しです。でも、心が輸入雑貨のお店で買ったペンを道子がまねして買っていたのを知ったことから、心は違和感をもち始めます。道子がわざわざ同じものを探して買ったことには私も思わずおどろき、「ん？」と声に出してしまいました。今の私だったら、仲良しの友達と同じペンが欲しいと思っても、文房具店になかったらあきらめるし、他にもペンはあるからいらないなと思います。人によってあきらめるか、あきらめないか、考え方は異なると思うけれど道子の行動には首をかしげてしまいました。

この他にも洋服や食べる物、何でも同じということが続き、心の将来の夢までまねをされた時、心は道子に怒りをぶつけてしまうのです。この心の言葉を読む時に、その情景が浮かび上がってきて、するどく怒りをぶつけている心と、とても反省をしている道子の顔が見えました。それと同時に、私も、イラッとすると、周りを考えずにするどく言ってしまうくせがあることに気が付きました。心も、後から道子が悲しむことは分かっていたけれど、それくらい自分の中ではがまんができなくなっていたのだと思います。

こうして二人の気持ちを理解して読んでいくうちに、自分と似ているところが分かってきました。道子は、前の自分に似ていました。私にも、道子と同じような経験がありました。友達の物と同じものを買い、悪気はなかったけれど、嫌な思いをさせてしまっていたのです。道子の気持ちと同じでした。前に先生が「人によってどう思うかはちがう」と言っていたことを思い出したから、今は「何で欲しくなってしまったのだろう。」という後悔と共に、「相手の気持ちも考えられたら良かったのかな。」という思いをもつことができています。また、自分に自信がもてなくて友達のまねをするという気持ちも分かるけれど、この経験から自分で決めていくことの大切さも学びました。

自分が困ったり悩んだりした時は、人のまねをするのではなく、人に聞いてみたり、話してみたりして、気持ちをすっきりさせるようにするということ、そして自分で考えて、進んでいくということが大切なのだと思います。これから、中学生、高校生、社会人になり、長い人生の中で、友達や人間関係で悩むことも多くあると思います。だからこそ、この本から学んだことを忘れずに、より良い自分になれるよう努力していきたいです。

（図書名『自分コンプレックス』）

〈講　評〉

自分で考えて自分で決めて行動すること。簡単なようですが、実はすごく難しいことです。結奈さんは、登場人物たちと自分を重ねながら物語を読み進め、自分との共通点にたくさん気づきました。そして、改めて自分と向き合うことができたのですね。

これからの人生。もし立ち止まった時には、この本のことを思い出したり周りの人に助けてもらったりしながら、「よりよい自分」を探してみてください。

岩手県ＰＴＡ連合会長賞（低学年）

まよなかかいぎがおしえてくれたこと

宮古市立山口小学校　二年
箱石　このみ

ある日、わたしに赤えんぴつさんからおたよりがとどいた。それは、まよなかかいぎのおしらせ。わたしはそのあんないどおり、お月さまのきれいな夜、本をひらいてゆうきくんのへやに行ってみた。

するとおどろいたことに、ゆうきくんのランドセルからノートやふで箱、クレヨンやカスタネットまで出てきて、みんなでわになってはなしあいをはじめた。

もっとおどろいたのは、たくさんのぶんぼうぐたちがゆうきくんのがんばりをはっぴょうしたこと。ゆうきくんはえんぴつを正しくもてるようになったし、下じきをノートの下にはさむようになった。まちがった字にはけしゴムをつかうようにもなった。前はできなかったことなんだね。わたしは、ゆうきくんがなぜかわったのか、そのりゆうが分かった。それは、おばあちゃんに手がみを書きたかったから。自分が学校でがんばっていることやあそびにきてほしいことをつたえたかったんだ。そのためには読みやすい字でなければならないことに気づいた。ゆうきくんって、やさしい心をもっていると思った。

ゆうきくんはやさしさだけじゃない。ゆう気もある。ジャングルジムのてっぺんに上がった。つかまるところは何もないところにだ。それは、木のえだにひっかかってしまったともだちのえをとってあげるため。人のためにこんなことができるのは、本当のゆう気をもっている人だけだと思う。

ぶんぼうぐたちは、もちぬしのことを見ていてくれるし、おうえんもしてくれているってことが、このまよなかかいぎにさんかして分かった。わたしも、ゆうきくんにまけないようがんばらなきゃいけない。わたしのぶんぼうぐさんたち、これからもきみたちをしっかりつかって勉強し、やさしさも大切に生活し、きみたちの自まんのわたしになるからね。

（図書名『まよなか　かいぎ』）

〈講　評〉

好南さんの一段落目の文章は、まるで物語の始まりのようです。しかも、本のカバーの最初と最後のさし絵を元にして書いていることに気付いた時は本当におどろきました。すみからすみ隅まで本を楽しんでいます。

また、好南さんは、かいぎに参加している文ぼう具達の話題に注目して書きまとめています。だから、文ぼう具と同じくらいゆうきくんのよさを見つけることができましたね。

最後の「きみたちのじまんのわたしになるからね。」という文もこのお話にぴったりです。

岩手県ＰＴＡ連合会長賞（中学年）

かあちゃん取扱説明書を読んで

盛岡白百合学園小学校　四年
佐々木　千　紗

この本を最初に見た時、まず題にひかれました。取扱説明書といったらいろんな道具についているもののはずなのに、母ちゃんのとはどういう意味だろうと不思議に思いました。読み進めていくうちに、題と同じくらい主人公が面白い子だなと思うようになりました。

主人公は、私がこの作文を書いている時と同じ、夏休み中の小学四年生の哲哉という男の子です。この哲哉が書いた母ちゃんについての作文から、お話が始まります。母ちゃんへの不満を正直に書いているだけなのに、とても楽しい作文です。しかし、哲哉は不満を書くだけでは終わらせませんでした。なんと、母ちゃん版取扱説明書を作ってしまうのです。しかも、説明書のとおりにすることで、母ちゃんは哲哉の思うように動いてくれるのです。楽しくなった哲哉は、どんどん項目を増やしていきます。

やがて、同級生で哲哉と同じようにお母さんに不満があるカズという子も、哲哉の真似をして取扱説明書を書き始めます。カズのお母さんは優しくていい人に見えるのに、カズはどこが不満なんだろう?と哲哉は不思議に思います。カズは、小さな子供扱いされるのがいやだと哲哉に話します。カズのお母さんがカズのためにやっていることでも、カズにとってはうれしくないのです。でも、これが哲哉が母ちゃんをどう思っているかを考えるきっかけになりました。母ちゃんが大切にしていたゴブレットを割った時、こわれた物よりも哲哉の心配をした母ちゃんの様子に、哲哉は本当の母ちゃんの気持ちがわかったのではないかと思います。

でも、母ちゃんはただものではありませんでした。面白いところはここから始まります。楽しい夕飯の席で母ちゃんは、自分だけ同窓会で海外旅行に行くことを初めて発表するのです。私はなあんだそういうことか！と思いました。哲哉の取扱説明書のおかげではなく旅行に行けるからきげんがよかっただけということがわかったからです。しかも、母ちゃんは哲哉が取扱説明書を作っていることを知っても怒りませんでした。哲哉が思っていることよりも母ちゃんはおおらかな人なのでしょう。

私も、お母さんに怒られることがありますが、取扱説明書を書こうとは思いません。人を操るようなことはしたくないからです。でも、哲哉の父ちゃんが言った「人が気づかないうちに、観察して付き合っていることがある。母ちゃんは、それがうまい。」という言葉には、そうかもしれないなと思いました。取扱説明書とは、皆と仲良くしていくためのひけつではないかと思います。私はおこりっぽいところがあります。自分の取扱説明書を書いてみると、自分のことがよくわかり、おこる回数がへるかもしれません。

（図書名『かあちゃん取扱説明書』）

〈講　評〉

主人公の面白さにふれたり、物語の母ちゃんを「ただものではない。」と表現したり、人物像に目を向けて読むことができました。主人公が考えを変えたきっかけにも気付き、物語を読み味わっていることが伝わってきます。

また、取扱説明書の意味についてじっくり考えました。自分の取扱説明書を書くと自分のことがよく分かり、行動が変わるかもしれないというまとめの文に、千紗さんが読書を通して深めた考えが見事に表れています。

岩手県ＰＴＡ連合会長賞（高学年）

〝社会の父〟に育てたものは

宮古市立田老第一小学校　五年
大下　澪

正しくないことを正したいという気持ちは若いころから強かった渋沢栄一。十七歳のときは代官のところにおもむき、税金の取り立て方について文句とも言えることを言い放つし、二十四歳のときは社会不安を抱える世を立て直すために幕府に企てをしようとした。これに関しては、同士の長七郎の話を聞き、大がかりな準備をしたにも関わらず、取りやめたのだが。

なぜ、栄一はここまで熱い心をもって行動をおこせるのだろうか。私なりに考えてみた。

第一に、人間愛にあふれているからだろう。栄一は、家業を通じて小さいころから人の喜ぶ顔を見ていた。自分が与えられた環境下で、自分がどのようにすれば目の前の相手が喜ぶのか、そして、同時に自分も幸せを感じることができるのかということを、実践的に学んできたと思う。その経験は、栄一の自信となり、自分という人間がこの世に存在することの意義を強く感じられた経験だと思う。

また、栄一の父の大らかな接し方も彼の人格を作ったと言えるだろう。特に私の心に残るのは、未成年である栄一が代官に税の取り立て方がおかしいと訴えたという話を聞いていたときの父の態度だ。当時の農民と武士の関係は、身分に天と地ほどの差があって、そんな訴えをしようものなら捕まって牢に入れられてもおかしくないはずだ。私が栄一の父なら、かなり厳しく叱るだろうし、もしかしたら、自分の子どもを外に出させないようにするかもしれない。それなのに、苦笑しただけだったという。しかも、栄一を気遣わしげに見ていたというのだ。その寛大さは、いつしか栄一に受け継がれ、どんな相手でもどんな状況でも、しっかり話を聞いたり冷静に情勢を見極めたりできるようになったのだと思う。

更に、民部公子とのフランスでの一年半の体験は、近代国家というものがどんな形でお金を世の中で回しているのかを見ることができた。お金をどのように使うことが国民のため、そして国のためになるのかという、栄一が理想とする答えを直接見ることができた。そんな模範解答ともいえるフランス社会を見たとき、栄一は自分が代官にお金のことで食ってかかったあの瞬間を思い起こしていたにちがいない。自分達の利益しか考えられない武士達。そんな要求に泣きながらも従うしかない自分達。十七歳の栄一が、そのとき流した涙は彼を粘り強く、幅広く動かすための原動力となったと私は思う。そして、フランスでの経験が、その力を二倍にも三倍にもして栄一の後押しをしてくれたと感じる。

今、こうして当たり前のようにたくさんある会社や団体は、栄一の存在が大きく影響している。また、私もその社会に生きる一人として渋沢栄一という人物の存在を、改めてありがたいと思う。

（図書名『渋沢栄一伝』）

〈講　評〉

渋沢栄一から、この本を通してたくさんのことを学んだ澪さん。自分なりに問いをもち、その答えを考えながら、じっくりと本を読み進めていったことがよく分かります。

「中」の部分には、栄一の人間性や業績、考え方などが自分の言葉で整理されています。自分の問いに対する答えを確かめながら読むことで、栄一に対する理解も深まっていったことでしょう。栄一の存在が今の社会にいきづいていることをまとめとし、明解な文章構成になっている点も見事でした。

審査を終えて

第七十五回夏休み良書推薦運動読書感想文コンクールには、県内四十三の小学校から八十五点（低学年二十九点、中学年二十四点、高学年三十二点）の作品が寄せられました。夏のコンクールとしては参加校数が多く、県内の様々な地域の子どもたちの作品を読むことができたということは大変嬉しいことでした。どの作品からも、楽しく本を読んだことや感じたことを一生懸命に書きまとめたことが伝わってきました。

以下、今回の審査で話題になったことをお伝えします。

【低学年】

一、二年生のみなさんは、お話の世界と、自分の身近にある物や自分が最近経験した出来事を重ねたり比べたりして読んでいました。「わたしの〇〇も、こうかもしれない。」「〇〇は、こう思ったのかもしれない。」など、自分の中にわいてきた気持ちを素直な言葉で書き表していて、感動したことや想像したことがよく伝わってきました。文とともに絵の細部までよく見ていることには驚かされました。

感想文の書き出しを工夫している点も見事でした。原稿用紙二枚という長さにまとめる時、まねしたい書き方だと思います。

【中学年】

中学年から原稿用紙三枚という規定になります。三年生は、三枚目の前半で書き終えた人もいましたが、入賞したみなさんや四年生をお手本に、三枚目の終わりまで書けるように、今後、頑張ってほしいと感じました。

読書感想文を書くときに、本の内容と自分の生活経験の部分とのバランスが大切になってきます。ともすると、生活文や意見文になりがちです。入賞した作品は、本の世界から離れすぎず、本に立ち戻って感想を述べていました。そのバランスが、読んでいて心地よいと感じました。

【高学年】

五、六年生のみなさんは、応募作品全体として、規定枚数三枚を使い、構成をよく練って書かれた文章が多かったです。効果的に自分の感想を述べるために、書き出しを工夫したり、引用を取り入れたりする書き方の工夫も見られました。また、自分の気持ちに一番ぴったりな言葉は何か、言葉を探し、吟味しながら書いたことも伝わってきました。

文学作品や伝記を読んだ作品では、感じたこと、考えたことを自分の生き方につなげているところが素晴らしかったです。文学作品以外のものを読んだ作品では、独自の視点をもって読んでいるところに感心させられました。

【書くときに気をつけてほしいこと】

どの学年でも、誤字・脱字や原稿用紙の使い方、縦書き表記の約束が守られていない作品が見られました。作品を書いたら自分で読み直していると思いますが、担任の先生やおうちの方にご指導をお願いできるといいですね。

なお、中学年の入賞作品に箇条書きの部分がありましたが、読んだ本が扱っている題材の特徴（取扱説明書）から、表記上の工夫として読ませていただきました。

次回の応募作品も楽しみにしています。

審査員　大渕　奈実

たくさんのご応募（おうぼ）、ありがとう。
次も、お友だちをさそってトライしてね。

次回予告

令和３年度冬休み良書推薦運動
第76回読書感想文コンクール募集要項

１　主　　催　岩手県良書推進協議会
２　協　　賛　岩手県学校生活協同組合
３　後　　援　・岩手県小学校長会　・岩手県学校図書館協議会
　　・（一社）岩手県ＰＴＡ連合会
４　課題図書　2021年　「冬休み良書推薦運動」
　　学年・学団対象24冊・学年共通６冊　計30冊　（10月下旬案内開始予定）
　　※上記以外の図書、学団（低・中・高）ちがいの場合は、審査の対象となりません。
５　用紙・字数　・１・２年生は400字詰め原稿用紙２枚以内
　　・３～６年生は400字詰め原稿用紙３枚以内
　　・１行目に題名、２行目に学校名・学年・氏名、３行目から本文
　　鉛筆は、Ｂ以上の濃さのもので書く。
　　・課題図書名は１枚目の枠外に縦書きで明記
６　応募作品　一人１点　（県下小学校児童）
　　応募作品は、オリジナルで自筆、未発表の物に限ります。
　　（他のコンクールとの二重応募は認めません）
　　・応募作品は、理由を問わず返却しません。（必要な場合はコピーをお取り下さい）
　　・応募作品の著作権、版権は主催者に帰属します。ただし、本人および在籍学校内での利用は妨げません。
　　・応募要項・課題図書名・前回までの上位入賞作品は学校生協ホームページで確認できます。
　　・応募された方の氏名・学校名・学年・感想文の題名・対象図書名および作品、表彰式の様子は、主催者および岩手県学校生活協同組合のホームページ、刊行物、取材報道 等で公表することがあります。
７　応募締切　2022年１月21日（金）当日消印有効
８　応 募 先　〒020-0691　岩手県滝沢市土沢220-5
　　岩手県学校生活協同組合　企画課 学用品内
　　「読書感想文コンクール係」
　　TEL 019(687)2246　FAX 019(687)2240
９　　賞　　最優秀賞・岩手県小学校長会長賞・岩手県学校図書館協議会長賞・
　　岩手県ＰＴＡ連合会長賞・優秀賞・入選・佳作・努力賞・
　　学校賞・学級賞